

留さんのボギー ― 宮本留吉 ―

「留さん、パーやな。」

ボールがホールにポトリと落ちた時、同じ組で回っていた岡橋泰一郎が声をかけた。

「いや、ボギーや。」

と、留さんは言った。

その日の午後、勝負どころの十三番ホールはパー５のロングホール。留さんは、プロならだれでもそうであるように、四打で決めるバーディーならいだった。しかし第二打はフェアウェイを左に外れ、小石まじりの砂地の上り坂のところへ落下した。ミスショットだった。第三打でグリーンのピンの近くまで寄せなければならぬ。留さんが打とうとした時、わずかに小石によって支えられていたボールがふいにコロコロと転がってしまった。ゴルフのルールでは、これも一打にカウントされる。

「ついてないな。」

留さんは舌打ちをした。

午前中はトップグループにいたものの、午後はリズムを崩し、じりじり後退していた留さん。優勝をねらうには厳しい状況で、この一打だ。留さんはやり場のない思いの中で第四打を打ち、グリーンにボールを乗せた。しかしピンまでの距離は遠い。ツアーパットで、ようやくボールを沈めた。

岡橋さんが、「留さん、パーやな。」と言ったのはその時だった。

「えっ……。」

フェアウェイから離れた砂地でのあの一打は、同伴者にも観客にも関係者にも、だれにも見られていなかったのだ。

岡橋さんの言葉は、留さんには意外だった。

ゴルフの戦いは一打を巡るし烈な戦いだ。だれにも見られていなかったから、知らん顔をしていれば、さっきの一打は帳消しになる。

留さんは、ホールからボールを取り出しながらゆっくり言った。

「いや、ボギーや。六打だ。さっきの砂地で三打目を打とうとした時に、ボールが動いてしまったんや。」

留さんこと宮本留吉は、一九〇二（明治三十五）年、六甲山に近い、現在の神戸市灘区に生まれた。留吉とゴルフとの出会いは、宿命的なものだった。生家のすぐ近くに、日本で初めてできたゴルフ場である「神戸ゴルフ倶楽部」があったからだ。小学生のころから土曜日、日曜日にキャディーのアルバイトをした。遊びはもちろんゴルフだった。木の枝をクラブにして、空き缶を埋め込んだホールをめぐって打っていた。後年、クラブづくりにも腕を振った留さんの能力は、そのころから芽生えていた。小学校を卒業してすぐに本格的なゴルフの練習を始め、そしてプロになったのは、二十三歳の時だった。

留さんの十三番ホールでの出来事は、一九五一（昭和二十六）年の関西オープンゴルフ選手権競技でのことだった。

結果は、三人が同じスコアで並び、翌日のプレーオフに持ち越された。

プレーオフで二人を制して優勝したのは、留さんだった。

優勝を祝う歓声の中で、留さんは昨日のあの一打のことを思い出していた。

もし岡橋さんに「パーやな」と言われ、「そうだ」と答えていたら、いったいどうなっていただろう。ゴルフのスコアは自己申告である。

「パーだ。」

と、あの時言っていれば、数字の上では単独優勝で、プレーオフなどなかったはずだ。

しかし、もし、そんなことをしていたら、優勝どころではなかったのではないか。心が乱れて、それから先、とてもまともなゴルフはできなかっただろう。

それだけではない。自分の心に大きなとげを刺したまま、これからプロゴルファーとして、いや、人間としての道を歩まなければならないことになる。今までに手にしてきた数多くの優勝や海外での活躍、華々しい実績も、きつと自分の心の中で地に落ちてしまったに違いない。

セレモニーの舞台に向かう留さんの姿は、りんとして輝いていた。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。